

気泡塔ニュースレター（第8号）

2008年5月12日発刊

【新代表からのご挨拶】

このたび、前分科会代表室山勝彦先生のあとをうけまして分科会代表を拝受いたしました寺坂宏一です。まずは謹んで会員の皆様にご挨拶申し上げます。

2006-7年の2年間、室山勝彦先生はじめ副代表竹田宏様、企画幹事太田光浩先生、会計吉本誠先生、お努めご苦勞様でございました。会員を代表いたしまして感謝申し上げます。

あらためまして今後2年間、新しく分科会幹事として、

代表(兼部会幹事) 寺坂宏一(慶應大)

副代表 太田光浩(室蘭工大)

企画庶務幹事 安田啓司(名大)

会計 岩田修一(名工大)

により、分科会運営を行わせていただきますのでよろしくお願いいたします。

さて今後任期内には、恒例の日独シンポや ASCON-IEEChE など国際学会があり、その開催に向けての拠点づくりが大切になってまいります。また他にも分科会の活性化や知識の集約などの問題に関するご意見も頂戴しております。

今年度はこうした本分科会の進路を今一度確認し、見直すために会員の皆様との間に何回かメールアンケートや本ニュースレターなどで意見交換をお願いしたいと考えております。

それらを参考にしつつ分科会の発展に微力ながら貢献させていただきたく存じます。ぜひよろしくご協力のほど賜れば幸いです。

以上、まずはとりあえず就任のご挨拶に代えさせていただきます。今後ともよろしくお願いいたします。

(分科会代表・寺坂宏一)

【訃報: 吉田文武京都大学名誉教授】

気泡塔分科会の前身の気泡塔研究会以来の会員であり、気泡塔研究の国際的草分けであった、京都大学名誉教授の吉田文武先生が、平成19年9月5日に94歳で亡くなりました。気泡塔分科会総会には毎回ご参加され、現在研究会行事となっている日独気泡塔シンポジウムを提案、創始され、93歳のご高齢にあつて、第7回独/日気泡塔シンポジウム(2006年5月、ドイツ、ゴスラー)では開会のスピーチを述べられました。先生の会への貢献に心より感謝し、ご冥福をお祈りします。

吉田先生を偲ぶ会(幹事、谷垣先生、岸本先生)より12月8日(土)気泡塔分科会に代表の参加要請があり、室山勝彦先生(関大)と土屋活美先生(同志社)が参加し、気泡塔分科会関連での先生の生前のご活躍を報告し、故人を偲ぶ話題を提供しました。



左:Merchuk 先生、右:吉田文武先生 Goslar にて
(関西大・室山勝彦)

【化学工学会第39回秋季大会シンポジウム報告】

9月13日、北海道大学での化学工学会第39回秋季大会で「気泡塔操作のイノベーションを目指して—気泡運動の解析、マイクロバブルおよび生物化学操作の応用」と題したシンポジウムが開かれました。18件の研究発表と1件の展望講演(阪大・上山先生)を行い、活発な討論が行われました。

(前副代表・竹田宏)

【気泡塔サロンの報告】

(1) 第10回気泡塔サロン 9月13日、北海道大学(第39回秋季大会)

演題:揚力によるマイクロ分離分級(東京工大・大河原真一先生)

(2) 第11回気泡塔サロン 2008年3月17日、静岡大(第73年会)

演題:電磁浮遊技術を利用した高温融体の熱物性測定(大阪府大・塚田隆夫先生)

両講演会とも非常に興味深い内容で、参加者から多くの質問があり有意義なものでした。講演会の終了後に懇親会が開かれ、会員相互の交流を深めました。



(前企画幹事・太田光浩)

【2008年第1回気泡塔分科会アンケート集計報告】

近年、装置名称である「気泡塔」のキーワードを冠した本分科会では、企業からの新入会員の伸び悩みや本分科会主催する日独気泡塔シンポなどでの論文募集が困難になるなどの問題が明らかになっております。一方で、気泡塔の装置設計法の確立やCFDの実用化、マイクロバブルなど新技術への期待が高まっています。

そこで、2008年度気泡塔分科会幹事会では分科会の将来を議論するために、会員の皆様に4月11日付でアンケートを配信しました。締め切り(4月末日)までに、12人の皆様(教授:4、准教授:2、助教:3、企業:3)からご回答をいただきました。ご協力ありがとうございました。

下記に集計結果といただいたご意見を列挙いたしました。

<質問1. 気泡塔分科会の現状について満足ですか?>

満足:3、不満:0、どちらともいえない:9

<質問2. 上記の理由をお聞かせください>

満足の理由:

- ・気泡塔分科会は若手も含めた研究活動の実質的な意見交換や交流が行いやすく、個人的には非常に有意義。規模の拡大に伴いさらに充実されれば良い。
- ・会員数は多くないが、その分親密な交流ができるのは捨てがたい魅力。
- ・化学工学会の中で、唯一の気の休まる集まり。
- ・気泡塔サロン、日独気泡塔シンポジウムなど多彩な行事が行われている。
- ・化学工学会の中で気液2相流が取扱える分野。

どちらともいえない理由:

- ・気体や粒子を液相中に分散して各相を効率良く接触させる技術(気体・粒子の液相分散技術)を用いる装置、操作は、多くの生産、処理プロセスにおいて必要不可欠。従って、本分科会の存在意義は、これまで同様今後とも不変であり、他の部会や分科会では代替できず、十分に独自性がある。しかし、今後とも本技術を通じて化学工学的課題の解決、真価の発揮には、これまで以上に活動を深化・拡大が必要。
- ・学会では発表について熱心に議論が繰り広げられており、国際会議なども定期的に行われているが、メンバーが固定されつつあり、企業からの参加者も多いとはいえない。
- ・独自性を出すために必要と理解できるが、他学会・研究会と比較すると「気泡塔」というキーワードの制約が強い。
- ・研究会の中心的先生方が定年となり、次世代が如何に対応するのが不明。

<質問3. 本分科会の将来について>

このままで存続:1、発展的改組が必要:8、不明:3

<質問4. 上記の理由をお聞かせください>

このままで存続をよいとする理由:

- ・学会、産業界で「気泡塔」のキーワードに魅力がないと考えないほうが良い。

発展的改組が必要な理由:

・現分科会も魅力はあるが、将来を考えると研究の進展に即した変化も必要。とくに装置設計という観点のみでなく、現象に着目した基礎的研究が必要。

・気泡塔に絞ってしまうと対象が非常に狭い。例えば気泡塔の実用例として培養が挙げられるが、気泡塔の適用には通気攪拌槽との比較が必要。しかし、本分科会には気泡塔の専門家しかいない。さらにMBや液滴のような混相流一般に関してもカバーするような分科会にすると発展性が高い。

・気泡塔研究会の設立の趣意はキープし、新たな展開を行う。研究内容を気泡を中心とした三相分散系に広げ、研究者層を厚くする。混相流学会との関係を今後どのように行うのかも検討。

・分散させる流体として気体の他に液体を含めて、流体・粒子の液相分散技術を用いる装置・操作を扱う。(A)産官学交流の観点から、技術シーズとニーズの相互発信、課題発掘や共同研究プロジェクトなど。(B)国際交流の観点で、日独連携に加えて新たな国際連携の構築や技術移転など。(C)活動の検証と将来展開へのフィードバックの観点で、最近の研究開発のレビュー、総説、解説書などの作成。(D)新規科学技術、用途の研究開発の点で、CFD、マイクロバブル、設計法、測定技術、プロセスなどの研究開発。

・より魅力のある分科会名への変更や適切な規模に拡大することが必要。

・対象とする装置が気泡塔だけでは範囲が狭すぎる。ただ、化学工学において、気泡や気液界面に関する研究は不可欠。守備範囲を広げての存続は必要。

・メンバーが固定されつつある。液滴を取り込むとよい。

・「界面現象」という切り口に注目すると、気液、液液等、関連する分野が広がる。

・気泡塔あるいは気泡に関する挙動については産業においても重要なテーマ。どのような形が望ましいかについてはまだ分からない。

・学会の中での本分科会の存在意義がよくわからない。日独シンポのように大学の研究者が主に集まることも重要だが、他分科会に比べ産学が連携していない。また、最近の本分科会での研究発表は、応用研究とCFDとに二分されているように感じる。

<質問5. 引き続き本(後継)分科会にご参加するか>

参加する:11、不明:1

<質問6. 新入会員に心当たりはあるか>

ある:5、無い:6、無回答:1

<質問7. 気泡塔分科会からの図書発刊に賛成か>

賛成:8、反対:0、不明:3

<質問8. 上記の理由をお聞かせください>

・最近の新技術をまとめた書物がない。気液接触関連の検討を行う際の諸注意などを体系的にまとめたハンドブックがあるとありがたい。

・企業の技術者からの気泡塔設計に関する問い合わせにこたえるべき。研究開発成果を集大成した知識体系を発信することは、当分科会活動の検証とともにその後の

活動の展開の基礎となるもので重要。講習会用テキストや授業の副読本として活用できるものが望ましい。

- ・マイクロバブル、CFD、バイオ分野における最近の研究成果は著しい。装置設計の観点から見ても、これらの研究成果に基づく新たな設計指針を盛り込んだ成書は必要。
- ・気泡塔あるいは気泡に関する挙動については産業においても重要なテーマ。論文だけでなく図書があるということは現場の技術者にとって非常にありがたい。
- ・既刊書の出版から10年以上経過しているもので、再整理する必要がある。
- ・門外漢としては、気泡塔の技術にそれほど進歩があったという印象はないが、関係図書があるインターバルで出続けていることは、分野存続のためには重要。
- ・そろそろこの分野の図書が欲しい。
- ・気泡塔の勉強をしたい。
- ・過去の研究会では、発刊に関して積極的な意見もあったが、昨年度の各種図書執筆では消極的な場面があった。

<質問9. どのような本の発行を期待しますか>

気泡塔設計ハンドブック:6、シンポジウムシリーズ:4、トピックス書籍:1、英語書籍:1

<質問10. 図書執筆に協力しますか>

協力する:6、辞退する:1、不明:4

<質問11. 執筆いただける章タイトルは?>

省略

<質問12. 第8回日独気泡塔シンポジウムへの参加>

参加する:5、不明7

以上、大変貴重なご意見をありがとうございました。これらを踏まえてご意見がありましたら、寺坂代表までぜひお寄せください。よろしく願いいたします。

(分科会代表・寺坂宏一)

【ICMF2007に参加して】

2007年7月9-13日ドイツ・ライプチヒの国際会議場にて International Conference on Multiphase Flow (ICMF2007)が開催されました。この会議には私の他、分科会からは上山先生(阪大)が参加されました。この会議は、1991年に筑波で最初に開かれて以降、1995年に東京、1998年にリヨン(フランス)、2001年にニューオリンズ(USA)、2004年に横浜で開催されています。内容は混相流に関するものが多く、論文採択までに複数の査読があり、出願された773の論文のうち、講演476、ポスター166が採択され、131件が不採択になっています。

会議はたいへん盛況で活発な討論が行われて充実した内容でした。次回ICMF2010は2010年にアメリカ大陸で行われる予定です。詳細は下記をご参照ください。

<http://www.icmf2007.org/index.php?index>



写真はICMF2007サイトより引用
(慶應大・寺坂宏一)

【GLS8に参加して】

The 8th International Conference on Gas-Liquid and Gas-Liquid-Solid Reactor Engineering (GLS-8)がニューデリーにおいて2007年12月16日～19日に開催された。会議のチェアマンは、IIT DelhiのK. D. P. Nigam教授である。アブストラクト・ブックの序文によれば、世界の27カ国から260のアブストラクトが投稿され、その内の170編がフルペーパーとして投稿を許され、レビューにかけられて、その結果4編の plenary lecture を含む62編が、Chemical Engineering Scienceの特集号に採録された。また、この特集号に採録されなかった54件の論文がポスターセッションに採択された。日本の大学からは4件の論文がCESに、1件がポスターに採録された。

会議は、India Habitat Centre (IHC)という、市内中心部のコンベンションセンターで開催された。会場は参加者に対して、十分な席がある部屋で行われ、部内あるいは屋外で、昼食などが必要に応じて準備できるようになっていた。

初日、午後、レジストレーションの後、Professor M. M. Sharma (University of Bombayの元教授、J.B. Joshiの師匠)の偉大な業績に対する表彰のセレモニーが2時間半にわたって開催され、その後ウェルカムパーティーとなった。

オーラルセッションは、2日間は終日、3日目は午前のみで、2会場並行して進められた。第1日午前は、会場1:トリクルベッド、会場2:気泡塔を含む気泡分散系のCFDシミュレーション、午後は、会場1:気泡分散のHydrodynamics、会場2:マイクロチャンネルフローや気液固攪拌など様々な気泡分散系のCFDなどの発表があった。

第2日午前は、会場1:トリクルベッドおよび気泡塔、三相流動層のHydrodynamics(九州大(現静岡大):真田先生発表)、会場2:気-液および気-液-固反応の解析およびシミュレーション(東洋大:川瀬先生発表)、午後は、会場1:気泡塔および三相流動層の気-液間物質移動および伝熱特性など(筆者発表)、会場2:多相系の吸着、触媒反応など複雑な系の問題の発表があった。

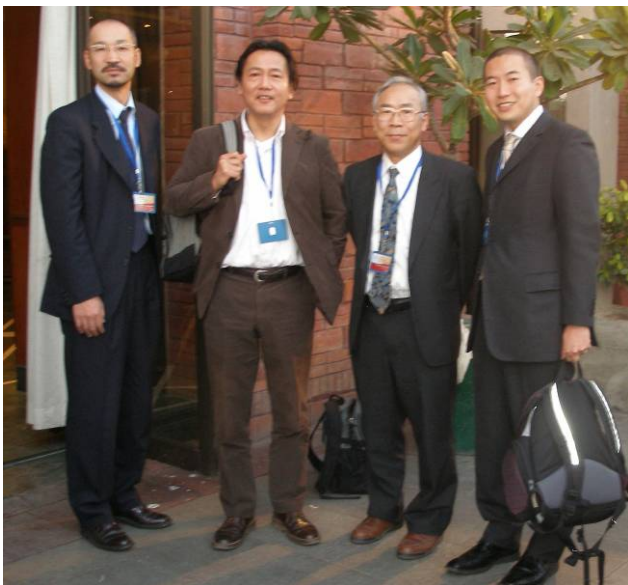
第3日、会場1:Process Intensificationと題するセッション、会場2:Microreactor Engineeringと題するセッションが行われ、3日目の午前中で全会議を終了した。

ポスターセッションは、1日目、2日目共に、午後のオーラルセッション終了後、17時～18時間という短時間に、狭い部屋に押し込められた感じで、それぞれ27件の発表があった。それぞれのセッションにテーマ的な分類はなかった。2日目のポスター発表に日本からの1件(新潟工科大:竹園先生)があった。

会議の印象としては、オーラルセッションで発表される論文は、CESの特集号に採録されるため厳しい査読の網の目を通るという点で、個々には質の高い完成度の高い研究論文であるが、新規性やユニークさといった点でどう評価されるであろうか?とくにトリクルベッドの論文が多いことも気になった。日本では20年以上前からトリクルベッドの研究は行われていない。主催者は、ポスターセッションで新規性の高い研究を救済しているのだろうか。

会議では、参加者の申し出による宿泊しているホテルを巡って会場との往復について乗り合い輸送サービスがあった。2日目からこれを使用した。初日はタクシーを利用した。インドという国情のためタクシー利用にはトラブルが続きまとう。最初に料金の交渉が必要、帰りなどは土産物店へつれてゆこうとする。どこかに寄ったとして、待ち時間の割増しを後で要求されるかもしれない。明日はどこかへの観光に迎えにくるからとか、どこまでもつきまとう。料金を払うときも金額の札を一まとめにして渡さないで、1枚1枚を相手と確認して行くのがよい。渡した後で、100ルピー足りないといわれなかったために。

会議では、コーヒー、水、ランチ、ディナー代が参加費に含まれているが、インド料理の皿から好きなものをもってナンと共に食べる。火の通っているものを食べるようにすれば、辛いことが我慢できれば問題がない。2日目のディナーでは、屋外で民族音楽や舞踊や曲芸などのイベントが行われた。



GLS-8 への日本からの参加者:左から、新潟工科大・竹園先生、静大・斎藤先生、筆者、静大・真田先生

インド観光で経験したことを雑文として述べたい。12月の会議中の気候は、デリーは北に位置し、ヒマラヤからの冷え

た空気が流れてくるとかで、涼しく感じる日が多かった。薄目の防寒着を持って行って良かった。インドはカーブ制が今に生きている超格差社会、代々路上生活している人々、交差点で止まる車に物乞いの手を差し出す女性や子供、古城内のトイレを維持することでチップをもらって生計を立てる人、オートリクシャというオート3輪車でぶら下がるように6人もの客を乗せてタクシーと競争し一度の料金50ルピーで生計を立てる運転手、オールドデリーに入ると(オートリクシャで移動の途中)蛇使いが駐車上脇に座ってコブラを立ち上げていたり、2人乗り人力車を自転車に引いて(リクシャという?50ルピー程度の料金)お客を運ぶ老人。

タクシーはやや高級な職業か1回の乗車料金が300ルピー程度だがメーターがないので最初に交渉が必要、非常に英語の流ちょうな50歳代の紳士的な運転手と一度遭遇したが彼は大学を卒業していると自己紹介、ただし普通遭遇するのは抜け目のない日本人をかもにする運転手がほとんど。

運転マナーは実にひどい、先へ先へと割り込み運転が普通で日本人の感覚では常にカーチェイス運転、あちこちで追突やリクシャとの接触事故などを見かけた。日本車の普通乗用車はいずれのメーカーのものもたくさん走っている。タージマハルに移動中では車が渋滞している路上で猿つかいが窓を通して写真を撮った同乗者にしつこく金を払えと窓をばんばんたたいた。また、国道をラクダの5～6匹の荷車の隊商が移動していたり、デリーの郊外では持ち主不明の牛が何頭も道路を自らのすみかとして歩き回り路上に糞尿を垂れ流す状態が日常風景、牛は神聖な動物で、もし牛を虐待などすると自分だけでなく末代までたたりを受けるので誰もさわらないとか、地方の町では大きな黒い象も見かけた。犬も放し飼いか、野犬なのか、また、城の中では猿も野生状態であった。つまり、野生と封建制と現代社会とが共存しているのがインドと言えるのである。

飲用水と食事には注意して過ごしたおかげで、インド滞在中特に体調を悪くすることなしに過ごせたことは幸いであった。基本的には火の通ったものを食べるということに注意すればよい。会議のランチで出た“アイスクリーム”をケーキとかクッキーと一緒に食べたが問題はなかった。唯一の失敗はインドでのベジタリアンの意味を十分理解していなかったということであろうか。帰国前夜、ホテルのレストランで、ベジタリアンとうたったカレー料理を食したが、まるで生野菜スパイスをすりつぶしたカレーといった感じのもので、日本に着いてから少し調子を崩した。

ニューデリーでは、他のアジアの大都市と違って、ショッピング街で食堂を探して食事ということが出来ない。外国人はホテル内のレストランで食事するしかないというのが筆者の感想である。

なお、次回GLS-9はカナダモントリオールにおいて2009年8月23～27日に開催(チェアマンおよび連絡先:Dr. Al-Dahhan, Muthanna <muthanna@seas.wustl.edu>)の予定で、さらにGLS-10は2011年にポルトガル・リスボンにて開催が計画されています。

(関西大・室山勝彦)

【第38回 Continuing Education Series 講習会】

2007年5月11日に「マイクロバブルの発生・測定および実用プロセスへの応用」講演・展示実演会として、日本混相流学会、粒子・流体プロセス部会の協賛で慶應義塾大学日吉キャンパス(横浜)で行われました。約100名の参加者がありました。



(慶應大・寺坂宏一)

【第3回マイクロ・ナノバブル技術シンポジウム】

2007年12月14日主催日本混相流学会・日本高専学会、協賛株式会社ナノプラネット研究所他で名古屋大学にて開催されました。運営には坂東先生・安田先生らが大きく貢献しました。また、講師として大成先生、坂東先生および寺坂が参加しました。たいへん盛況な講演会でした。

(慶應大・寺坂宏一)

【今後開催される気泡塔に関係の深い国内・国際学会】

<分離技術会年会 2008>

2008年6月6日(金)～7日(土)の2日間、明治大学生田校舎において分離技術会年会2008が開催されます。ガス吸収のセッションでは2日目に設定されており、3件の口頭発表と13件のポスター発表が予定されています。皆様奮ってご参加ください。

<http://www.sspej.gr.jp/>

(日本リファイン・坂東芳行)

<日本混相流学会年会講演会 2008>

2008年8月8日(金)～10日(日)に会津大学で開催される日本混相流学会年会講演会2008において土屋先生がオーガナイザーを務める「OS-3 物質輸送と水処理」、大成先生・寺坂がオーガナイザーを務める「OS-14 マイクロ・ナノバブルの科学と技術的展開」が予定されています。マイクロバブルに関心のある方のご参加をお待ちしています。

<http://www.toptour.co.jp/conv/3218/jsmf2008/>

(慶應大・寺坂宏一)

<First ASCON-IEEChE 2008>

流動層・三相反応器に関する主として日、韓、台のアジア会議は10回開催されましたが、今回新たに会議名称を”1st Asian Conference on Innovative Energy & Environmental Chemical Engineering/ A New Paradigm Emerging from Fluidized-Bed and Three-Phase Reactors”としてエネルギー、環境を包括した広い研究分野の発表の場として、今年8月31日～9月3日にかけて、札幌で開催

することになりました。既に上記参加国だけでなく多くの国から発表・参加申し込みがあり、アジアにおけるこの分野の重要な国際会議の地位を確立しました。この時期の札幌は大変よい気候で、すばらしいエクスカージョンも予定されています。皆さんふるってご参加下さい。詳細は下記HPをご覧ください。

<http://web.mac.com/exergy/iWeb/Site/ASCON-IEEChE.html>

(ポリテクカレッジ浜松・内田重男)

<化学工学会第40回秋季大会 S-4>

2008年9月24～26日東北大学川内北キャンパスにて化学工学会第40回秋季大会が開催されますが、本分科会では「S-4 気-液、液-液、気-液-固、気-液-液分散系プロセスのイノベーション」と題したシンポジウムを企画しています。気泡塔だけに限らず、約30件にもものぼる多相系、混相系の現象に関わる講演が申し込まれており、学会の初日および2日目午前にわたっての開催が予定されており、現在オーガナイザーがプログラム編集中です。展望講演1件も加わり、これまで以上に盛会となりそうです。また、このシンポジウムは粒子・流体プロセス部会プレゼンテーション賞の対象となっております(詳細は、<http://www2.scej.org/partluid/sympo40.html>)。皆様お誘いあわせの上、ぜひご参加いただき、分散系の諸テーマについて活発な討論をよろしくお願いたします。

<http://www2.scej.org/meeting/40f/>

(分科会代表・寺坂宏一)

<第12回気泡塔サロン>

上記の化学工学会第40回秋季大会のS-4シンポジウム1日目終了後に、本分科会恒例の気泡塔サロンを計画しております。講師として住友化学の島田直樹氏をお迎えする予定です。また、気泡塔サロン終了後には懇親会も予定しておりますので、ぜひ皆様お誘いあわせの上ご参加ください。

(企画幹事・安田啓司)

<分離技術国際会議 ICSST08>

2008年10月2日～5日に日本大学研修所(軽井沢)にてThe 8th International Conference on Separation Science and Technology (ICSST08)が開催されます。「Gas Absorption」への申し込みをお待ちしております。(5月30日:発表申込締切、7月31日:論文提出締切)

<http://www.sspej.gr.jp/nikkan.html>

(日本リファイン・坂東芳行)

<IWPI2008>

2008年10月15日～18日に東京工業大学大岡山キャンパスにてInternational Workshop on Process Intensification 2008が開催されます。2006年に神戸大学にて第一回のIWPIが開催され、今回が二回目となります。本会議でのTopicsは、化学工学分野を幅広く対象としておりますので、奮ってお申し込みくださいますよう、ご案内申し上げます。

なお、会議後に Journal of Chemical Engineering of Japan の特集号が発行される予定です。

<http://www.chemeng.titech.ac.jp/~IWPI2008/index.html>

(室蘭工大・太田光浩)

【新入会員のご紹介】

<鹿児島大学工学部応用化学工学科水田敬氏>

気泡塔分科会の皆様、初めまして。鹿児島大学水田と申します。現在は、単一のカラーデジタルカメラを用いた二色 LIF 法による pH 分布測定法の開発と、それを用いた混相系における物質移動現象の解明を目的として研究を行っております。また、混相系における熱移動問題として、フラットヒートパイプ型ヒートスプレッダの開発なども行っております。何かと分からないことだらけで日々悪戦苦闘致しておりますので、是非とも、皆様方より御指導頂きまして、研究を前進させていくことが出来ればと存じます。今後とも、宜しくお願い申し上げます。

<東京工業大学大学院理工学研究科松本秀行氏>

現在まで、主な専門分野はプロセスシステムで、「知的システム」や「ハイブリッドシミュレーション」に着目した研究教育活動に従事してきております。最近では、プロセス制御において画像を取り扱う方法論に注目した研究を行っており、適用プロセスの一つとして気液二相系や液液二相系の流体操作に興味を抱いているゆえ、このたび気泡塔分科会に入会させていただきました。本分科会への参加を通して、マイクロ～マクロの様々なスケールでのプロセス解析・モデル化・シミュレーションへの考察の範囲が広がることを楽しみにしております。どうぞ宜しくお願いいたします。

<八戸工業大学工学部生物環境化学工学科小林正樹氏>

この度、本分科会に入会させて頂いた小林正樹と申します。これまで主に輻射伝熱を含む熱流動解析に従事してきましたが、気泡塔のような混相流に関してはほとんど知識がありません。末席で勉強させて頂きたく、よろしくお願い致します。

<旭硝子中央研究所鈴木悠介氏>

慶應義塾大学大学院修了後入社し、現在4年目の27歳です。化学部門をはじめとしてさまざまな新規生産技術開発に携わっており、気液・液液の流動解析にも非常に興味を持っております。どうぞよろしくお願い致します。

<カネカ生産技術研究所田中航介氏>

気泡塔分科会の皆様、はじめまして、カネカの田中航介です。学生の頃、少しだけ気泡塔関連の研究(微小重力下での気泡生成)をかじっておりました。就職してから数年間は、ポリマーの精製プロセス検討を中心に検討しておりましたが、最近では、先述の検討に加え、通気培養槽の設計の他に、本分科会の代表の寺坂先生と気泡塔の基礎検討もさせて頂いております。気泡塔に限らず通気攪拌槽等、気液混相流動に関心があります。今後ともよろしくお願い致します。

【入会のお勧めとホームページのご案内】

気泡塔分科会では新入会員を歓迎しています。会員になりますと「気泡塔」に関連した様々な企画や情報が提供されます。化学工学会の正会員または学生会員であれば会費は無料です。手続きは簡単ですので、まずは是非ホームページ (<http://www.applc.keio.ac.jp/~terasaka/bc/>) にアクセスしてみてください。

(分科会代表・寺坂宏一)

【編集後記】

2002年9月18日に気泡塔ニュースレターが創刊された際、私は分科会副代表として河越幹男代表のもと、編集に携わっていました。その後、第7号が2005年9月15日に配信されて以来、すこし時間があいてしまいましたが、本日再び気泡塔ニュースレター第8号を配信できてすこしほっとしております。

このニュースレターでは分科会企画のご案内、各種関連の深い学会の論文募集情報、会員の方々の国内外の学会への参加報告を定番記事として、その他新入会員の方のご紹介や TOPICS 記事の掲載を考えております。ぜひ皆様からこんな記事を載せたいとのご要望がございましたらご遠慮なく分科会幹事・編集局までお申し出ください。

(ニュースレター編集・寺坂宏一)